第5回　四日市東日本大震災支援の会災害ボランティア活動報告

2011年7月18日
四日市東日本大震災支援の会
代表　鬼頭浩文

支援の会では、5月から7月にかけて合計4回、のべ8日間にわたって宮城県東松島市において災害ボランティア活動をしてきました。残念ではありますが、今回の第5回の派遣は、本隊のボランティア・バスパックの派遣を辞退する決定をさせていただきました。大きな理由は、現地ニーズの終息と、連休・夏休み初日にボランティアが殺到していることです。われわれが出かけることが、かえって現地に迷惑になるという結論に達し、派遣辞退の判断をしました。

そのバスパックに替えて、本会は少人数の調査隊を結成して現地に入ることにしました。メンバーは、本会代表＋学生スタッフ2名と、桑名北高校教諭＋高校生2名です。目的は、今後の会の活動方針を決定するための情報収集です。桑名北高校からの参加は、今までボランティアに参加できなかった高校生たちが、どのような支援が可能なのか、実際に高校の代表が実際に現地に行って活動することを通じて考えてもらう目的でした。今後、本会では、高校生の支援活動を積極的に支援していこうと考えています。

スケジュールは、乗用車で15日の金曜夜に四日市大学を出発し、翌朝現地に到着、ボランティア活動に加わり、夕方には被災地を視察して今後の活動についての情報収集、夜には被災されたお宅（本会が床下のドロ出し作業をさせていただいたお宅です）に宿泊させていただいて被災者の現状や気持ちを聞かせていただくというものです。このような調査隊の派遣により、本会の今後の活動と高校生たちの支援の取り組みについて意見交換をしたいと考えました。限られた時間にどれだけのことができるのか不安はありましたが、予想以上の活動と視察が実現し、有意義な調査隊の派遣となりました。

初日は自動車による夜行ということで、バスと比べると短時間で到着はできる予定でしたが、仙台南部・東部道路などが復旧工事による夜間通行止めで、東松島市役所の近くにあるボランティアセンターに到着したのは朝6時でした。すぐに朝食をとり、ボランティアの準備を整えてセンターでの受付をすませ、自動車で赤井地区の指定されたお宅に向かいました。作業内容は、被災して汚れた食器棚の消毒・設置と食器類の消毒などでした。午後までその作業が続き、終了後に入浴してリフレッシュしたあとは、大曲浜の津波で壊滅状態になったエリアを視察しました。木造家屋の多くが土台だけを残して消失し、住宅地であった場所に大きな船が乗り上げています。あまりにも理不尽で悲惨な津波被害を受けたこのエリアは、現在では危険地域に指定されており、家屋の撤去や片付けはほとんど進んでいません。ここから、内陸側に広大に広がっていた田んぼを津波がさらに数km走り、大曲浜の家屋や自動車など、生活や生命が何kmも流されていきました。

夕方には、一晩お世話になるお宅の親子と合流し、その親子の案内で石巻市の日和山に行きました。ここは、旧北上川の西岸にある標高約 60m の山で、被災してほぼ全滅した石巻港のエリアが見渡せます。ここは、3 月 11 日の夜に津波から逃れてきた方が 1000 人以上避難した場所です。避難した人びとは、津波に街並みや人が飲み込まれていく悲惨な光景を何もできずにただ見つめていたといいます。そして、雪の降るとても寒い夜を過ごした場所です。被災した街が展望できる公園から階段をくだり、全滅した市街地を歩きました。あまりのことに言葉が出ません。胸が締め付けられ、足はガクガクと震えてきます。全く人の気配が感じられない静かな被災地を歩くと、まだ片付けられていないガレキの中に、生活道具がたくさん埋もれています。人びとの生命や生活・仕事を奪っていった津波の恐ろしさは、われわれが想像できるようなことではないと思います。再び階段を一歩一歩登って日和山に戻りましたが、この階段を必死に駆け上り、津波を振り返った人びとの当時の想いはどのようなものだったのでしょうか。

夜には、お世話になる家族と食事に出かけました。被災地の飲食店も多くが営業を再開しています。少しずつですが生活や経済が動き始めています。仮設住宅への入居も進んで、半壊家屋もだんだんリフォームが進んでいます。しかし、いまだに避難所生活を送っている方々が数多くいて、仕事を失った皆さんは生活設計がたちません。高校生や大学生は、地元の求人がほとんど無いのが実情です。ボランティア・ニーズが 7 月中には終息するという社会福祉協議会の見通しがありますが、被災者が我慢しているから終息しているという考え方もできます。被災者が自分で復興へ向けた活動を必死に頑張っている結果なのかもしれません。まだまだ支援が必要であることは間違いありません。この家族も半壊した家屋の修理は冬までかかるそうです。まだ一部の床下にはヘドロが残っているといいます。網戸が津波で破壊され、エアコンも設置が遅れ、扇風機も品薄で入手困難という状況で、生活そのものは、4 月から非常時のとても不自由なものであることは変わっていません。

夜行とボランティア活動で疲れたわれわれは、10 時過ぎには就寝し、朝までぐっすり眠りました。その眠った部屋は、われわれがゴールデンウィークに床下のドロを出したその部屋です。そこに仮の板が張られ、ブルーシートが広げられています。電源も数箇所が使えるようになり、数日前にはテレビが設置され、われわれが名古屋で購入して持っていった扇風機が元気よく回転していました。ドロ出しの作業をした当時は、人が住める状況まで戻るのにまだ多くの作業と長い時間が必要だと思っていました。まだ畳は敷かれていませんし、壁も汚れたままですが、こうして一晩寝てみると、綺麗にリフォームされた部屋で家族が笑って食事する場面が想像できるようになりました。われわれメンバーは、朝食に出していただいたおにぎりと味噌汁をとても美味しくいただきながら、そのような日常が戻る日を思い浮かべて少し明るい気持ちになれました。

今回の調査隊の活動を通じて考えたことは、とくに被害状況の違いによる被災者の気持ちの差異です。津波被害は、海岸付近の全壊家屋から半壊、浸水のみまで、程度の差があります。家族や親戚が亡くなった方、いまだに行方不明の方、置かれた状況はさまざまで

す。さらに福島県では、原発事故による被害が重なります。家屋が無事だったのに避難しなければならなくなった方、家族や親戚が行方不明なのに捜索が十分にできない地域の皆さん、考え方や想いが、それぞれ異なります。仕事や学校とのかかわり方も、大きな影響を受けています。行政の対応を待てずに、東北から離れて仕事や学校を探して避難したり新しい生活を始めたりしている方が多くいらっしゃいます。

全てが無になり静かになった街を歩き、ここに存在した日々の営みが一瞬に奪われていった無念は、何回も現地に行ってボランティア活動をしていても、本当には理解することができそうにありません。石巻の人の気配のない壊滅状態のエリアを歩いて感じた重圧は、とても深い悲しみや絶望感がから来るものだと思います。目の前に広がる現実、強い臭いは感じるけど音が無い、そこからやってくるメッセージは、とても言葉では表せないものです。どのような支援が必要かを考えることも重要ですが、やはり寄り添う気持ちをいつも忘れない、常に自分のこととして思い続けることが大切だと感じました。

＜参加者＞

学外 3、学生 2、教職員 1 の計 6 名

＜スケジュール＞

7 月 15 日：夜に四日市大学出発

7 月 16 日：東松島市赤井地区で活動⇒被災地視察(東松島市大曲浜・石巻市比日和山など)

（第 1 回派遣で作業に入ったお宅に宿泊させていただきました）

7 月 17 日：早朝東松島市出発　⇒　夜四日市大学到着